保育随想　幼児の夢(三)

おきくさまのおつきさま

葛原しげる

「パパ、パパ、たいへん、たいへん。はやく、はやく。ねえ、パパ、早くー」

手狭の家ながら、東の縁側から、大声を上げたのは、この新家庭の長女文子、年は四つ。

この文子、生後極めて順調に発育して、目もよく見え、耳もよく聞え、言語は明晰、語彙も豊富、表現も適確、センテンスもかなり長く続くので、若きパパ、ママ、時に舌を巻いている。その上、目に耳に映る森羅万象を、ズバリズバリ、実に寸毫の間隙をおかず言い現わすので、相手になるのがおもしろく、時には、教わることもあるので、パパも、ママも半ば怖れながら、せいぜい、共に暮らし、その感受性の敏感正確なのに、驚きもして、自分の幼時を追憶し、反省もしている。

「ねえ、パパ、早く。たいへん、たいへんー」

愛児に、たいへんと呼ばれて驚かない親はないのですが、東京では、たいした事でもないのに

「まアたいへん」「あらたいへん」

などと、かなり大袈裟にいうこともあるのは事実ですが、愛児の、真剣な呼び声は聞き捨てられず、急いで来たパパが、

「何。どうしたの」

と問うまでもなく、文子ちゃんは、縁側からすぐ近く見えているお隣の家の大松と、大きい屋根との少しの隙間から見えている月の出を、不思議そうな顔付で、見守って

「お隣の屋根、たいへん、たいへん。ね、ね」

と心配げなのです。その月は、今、地続きの原っぱの向う、遙かな地平線上に、昇り出たばかりのところなのです。東京都下でも珍らしく広い原っぱ、その原っぱの向うも原っぱで、原っぱに、原っぱが連なっていて、どこまでもどこまでも続いている原っぱですから、月は、いつも、その地平線上遙かに、踊り出るのです。文子ちゃんも、日曜などには、パパと、この原っぱへ、散歩に行くのが大好きで、富士山もよく見えるので、一そう、大好きな原っぱです。その原っぱに踊り出たばかりの月が、文子の家の縁側からは、お隣の屋根に、くっついて見えるのです。それを、文子は、

「ねえパパ、たいへん。

大きな　真っ赤な　おせんべい
真っ赤な　大きな　おせんべい」

と真顔になって見守って、何だか、不安げなのです。大きな火の玉とでも見たのでしょうか、目を丸くして見続けるのです。とんでもない事に、おせんべいだと感違いして——。

「何だえ、あれか。あれは、お月さまだよ。本当に大きいねえ。大きいお月様だねえ。ずい分、赤く見えるねえ」

「あら、パパ、ちがいますよ、ちがいますよ。おきくさまじゃありませんよ、あ

れ。」
文子、この頃、いまだ、幼児からの口癖が、完全には直らないで「お月様」のことを
「おきくさま」といって平気でした。しかし、少し大きくなってからは、はっきり
「お、つ、き、さ、ま」
と発音するのでしたが、何かの事で、急いだり、せき立てられる気持で、早口になると、だめでした。今も、あまり緊張しましたので、自然、早口になって、
「おきくさまは、もっと小さくて、あんなに赤くなくて、おつむの真上にあるんですよ、パパ。おきくさま、円いけど、小さくて、白っぽくて……」
と、いとまじめです。なるほど、満月、中天高くかかっている時は、あんなに大きく見えず、あんなに赤くもありません。しかし、あれは、今、地平線上に踊り出たばかりの月に、違いありませんから、パパは、ゆっくり説明してきかすのでした。
「大丈夫だよ。あれ、お月さまだよ。だけど、もすこしたつと、お隣の屋根から離れて、松の枝の間からでも、もすこし小さく見えるようになるし、色も、あんなに赤くはなくなるんだよ。」
「ちがいますちがいます、パパ。あれ、ね、大きな　真っ赤な　おせんべい、
　真っ赤な　大きな　おせんべい」
と繰り返すのです、そう信じきっているのです。そこで、パパは、急に、話の筋を変えました。
「ね、ちょっと、今日ねえ、おやつに、何をいただいたの」
「今日のおやつに――」
「そう、今日、お三時に、ママは、何下さった？」
「今日のおやつ、あのね、あのう―」
「あのう、何？」
「あのね、昨日と、おんなじ」
「昨日、何下さったの」
「今日とおんなじ」
「そう。まるい、赤い、あれだねえ。文子のおやつは、毎日、あれねえ、毎日、おんなじねえ」
「ええ」
そこで、パパは、急に、はっきり思い当りましたので、両手を叩いて
「うん、分った、分った」
と声が大きくなりました。
「ねえ、分ったでしょ。おやつ、何だったか、分ったでしょ」
「いやいや。分ったのは、おやつの事じゃないんだよ」
「あらパパ。まだ、分らないんですか、おやつのこと。いやなパパ。教えて上げましょうか、あのね、―」
「いやいや、その事じゃないよ。あのね。文子ちゃんが、なぜ、お月様の事を、おせんべいというか、それが分ったんだよ」
「……」
少し、込み入ってきましたので、さすがの文子ちゃんも、すぐの返事に困って、だまってしまって、パパの顔を見上げて、立ったままでした。しばらくの間、沈黙が、この楽しい父子を、取り巻きましたが、パパは、急に、態度を変えて、
「うん、なるほどねえ。なるほど、あれは文子ちゃんのいう通りだわい。おきくさまでなくて、おせんべいだったよ。な

るほどねえ、大きな真っ赤な　おせんべいだね。真っ赤な　大きな　おせんべいだね」と、言いきりましたので、文子ちゃん、いよいよ嬉しくなってしまって、

「ね、パパ、お隣の屋根に、どうして、大きな真っ赤なおせんべいが—」

「本当にねえ、お隣のおばさま、どこで買っていらしたのかねえ」

などと、いっている間にも、月は、屋根を離れて、松の枝も、一番下の一の枝から、次の二の枝に上っておりました。でも、まだ、少し黄味を帯びた赤色で、大きさも、まだかなり大きくて、中天高くかかる月とは、変って見えておりました。

「ね、文子ちゃん。ママの下さるおやつ、昨日も、今日も、小っちゃいおせんべいだったねえ」

「ええ、おしおせんべい。」

「円くて、赤くて、お醤油をつけて焼いてあるんだねえ。あのう、白いお砂糖をつけた分はおいしくても、歯に悪いんだねえ」

「ええ、赤いおしおせんべいの方が、はあは（歯）に善いんです」

といって、求められもしないのに、小さい口を開けて、歯の善いことを、自慢するように見えましたので、

「あんこのおまんじゅうや、甘いあまいチョコレイトは、いけないんだねえ。」

「ええ」

文子は、自信たっぷりの合点をして、いよいよニッコニッコと、大得意です。

「よしよし。それで、明日は、お隣のおばさまに、お願いして、あの大きい真っ赤な、おしおせんべいを、歯の善い御褒美にいただくことにしようかナ」

と、パパが、ふざけていると、やっと勝手の御用の済んだママが、縁側に出て来て、

「まあ、きれいなお月さまですこと」

と、目敏くも、すぐ見つけた月は、もう、お隣の大松の、二の枝から離れて、三の枝もも少しで、離れてしまうあたりまで昇って見えました。

「あら嫌なママ。あれ、おきく様って—。ね、パパ、あれ、おきく様じゃありませんねえ、ねえパパ。」

「そうそう。おせんべいだよねえ」

「何ですって、パパ。」

と、ママにつめよられるや、パパは、わざと、一そうまじめな顔付で、

「あれ、お隣のおば様の、しおせんべいサ」と、かるくあしらうのに、力を得た文子ちゃんが

「ねえね、パパ。あれ、しおせんべいね、パパ」

「そうだ。ママのおやつの、しおせんべいは、いつも、小っちゃいから、明日はお隣へいって、あの、大きいのをいただこうね」

「まあ、とんでもない」

と打つ手付はいと軽快ながら声を励まして、ママは、一生懸命。

「ね、文子ちゃん。あのね、月がね、地平線上に現われると、空気の密度と、光線の屈折の工合で、人間の眼が、ごまかされて、大きく、真っ赤に見えるんですよ。いいですか。そしてね、地球が、自転するから、あそこに見えてる月も皆のお頭の上に見えて来ますよ。ね、この地

球はね、自転しているんです」
と両肱を、右左の肩のあたりまで上げて曲げて、上半身を、斜めにねじまげて見せるのでした。しかし、その原理も、四歳の幼女には、分るべくもありませんが、「自転」ときくや、文子ちゃん、急に思い当ったらしく、
「あ、そうなの、パパとママと、文子と、あの、自転車に乗って、廻るの」
「あら、ちがうわよ。」
「いやいや、そうだよそうだよ。自転車に乗って、ぐるぐる廻るんだよ」
と、やじるパパを、
「あら、まア」
と軽く睨んで、文子ちゃんに向って、ママ
「ね、文子ちゃんね。ほらほら。お月さま、もう松の木の上の方へ、出てしまったでしょう、そして、前ほど、大きく見えないし、前ほど赤く見えないでしょう。みんな、光線の屈折と、空気の密度のためよ。そして、この地球が自転するから、今に、おつむの上に見えるんですよ。分った。大きくなって、学校へ上ると、よく分るようになりますよ」
ママは、女学校時代の家事科で、幼児の疑問は、発明発見の基であるから、繰り返し、ていねいに説明してやらなくてはならぬと、教わった事を、正に思い出して、文字通り、繰り返し、ていねいに、説明してやっている時、さっきから、かすかに聞えていた歌の声が、少しずつ、近くなってくるのは、どこかのお姉様が、地続きの原っぱを、散歩しながら、歌っていらっしゃるのか、澄んだソプラノ。
『出た　出た　月が
　まるい　まるい　まんまるい――』
「あら、いいお声」とママ。
「いつきいても、いい歌だねえ、あれは」とパパ。
文子ちゃんも、知っている歌ですから、ニコニコして聞き入るのでした。そして、今更に、空の月を見上げて、いうのでした。
「やっぱり、おきくさまだったのね、ママ。」
「そうですよ。もう、すっかり、赤くなくなって、白っぽいような光りで、明るいことね」
「さっきは、あんなに大きく見えたのに――」
原っぱの歌声は、少し遠のいていくのでしたが、また、初めから繰り返されて、
「まあるい　まあるい　まんまるい
　盆のような月が――」
と、はっきり聞えました。すると、急に、文子ちゃんは、
「あら、あら。ね、盆のようなって、お盆のことでしょう。ママのお給仕の、お盆のことでしょう」
と、合点して、駈け出して、お勝手の方から持って来たのは、この新家庭の盆、それは、長方形の茶盆。
「ね、ママ、これが、盆でしょう」
「そうよ、お家のは、角いけれど、円いのが、本当なのよ」
「あら、いやーだ。お家の　このお盆は、うそのお盆ね。あら、いやーだ」
すると、パパは大声で、
「おいおい、善い歌が出来たよ。今、出来たんだ。月の歌だ。ね、よくおきき――」

と歌い出したのは「出た 出た 月が、まるい、まるい、まんまるい」と、昔からの、同じ歌でしたから、ママも、文子ちゃんも、少し張合ぬけで、がっかりしていますと、パパは、

「この次が、大事なんだよ。いいか、
まあるい、まあるい、まんまるい—
いいか、この次だよ。笑うな。
まあるい、まあるい、まんまるい—」

と、大まじめで、太い声を、張り上げて、

「おせんべいのような月が」

と歌ったので、皆、大笑い。そして、

「まア、きばつな月の歌ですこと」

とママ。

「なに、きばつじゃないよ、本当の歌だよ。ねえ、文子ちゃん。今夜の月は、まるいけど、盆じゃなくって、おしおせんべいだねえ。」と、大まじめでパパは、

「ねえ、そうだよ。『盆のような』が本当なら、今夜の月が、角い月にならなくちゃ本当でないよ。お家のは、円い盆でなくて、角い盆だものね。

子どもの歌は、子どもの世界から、生れ出るもんだって、何かの本に書いてあったものね。少なくとも、お家の月の歌は『まあるい まあるい おせんべいのような』でなくちゃ、うそだよ。ねえ、文子ちゃん」

「ええ、ほんと」

と、文子ちゃんも大きくうなずいて、大ニコニコです。

「つまり、文子ちゃんが、生み出したようなものさ、この月の歌は——」

「うそ、うそ。パパが、お作りになったんですよ。」

「だけど、文子ちゃんに、教わったんだから、文子作詞というわけさ。アハハ……」

この時、原っぱの方から、また、聞えましたのは、同じ月のうた「出た出た—」でしたが、「まあるいまあるい」の次は、いつまでも同じ「盆のような月」でした。そこで、パパが、

「さ、お家のを歌おうよ」

というので、ママも、文子ちゃんも、月の方に向って、真っ直ぐに立って、パパと三人で、声を揃えて歌いました。

『出た 出た 月が
まあるい まあるい まんまるい
しおせんべいのような月が』

歌ってしまわない間に、おかしくなるのを、ママは、がまんしたので、少し、声が、つまるようでしたし、パパは、太い声を張り上げたので、どなるようになりましたので、文子ちゃんが、おかしくなって、困りました。

「さ、もう一ど、笑わないで、少し、ゆっくりね。三、四、
出た 出た 月が
まあるい まあるい まんまるい
しおせんべいのような月が
うまい、うまい。」

で、三人、それぞれ、ニコニコしながら、お手手を叩いて、顔を見合わせて、うれしそうでしたが、その誰よりも、本当に嬉しかったのは、空高く澄んで、この縁側を見下ろしていらしたおきくさまの、おつきさまでございました。めでたし めでたし。

（昭和36・7・5。西片町宅にて）